

「母乳育児奮闘記」

みやぎ母乳育児をすすめる会 監事 塚 武男

第 25 回

この時代の母乳育児支援者の在り方について 2024 年の母乳率調査の結果から考える

今年の 7 回目となる「みやぎ母乳育児をすすめる会」の母乳率調査で現在の母乳育児の傾向が少しではあるが把握出来たように思われます。

全体的な数字は母乳率は低下傾向にある様に見えますが、基本的に乳児期早期の母乳率はそれ程低下してはいないと考えています。つまり母親たちの母乳で育てたいという気持ちは根本としてはあまり変わっていないと思います。但し、これまでであれば完全母乳（以下完母）であったであろう母親たちが、意図的に数回の人工乳追加を行っているようです。その傾向は調査の結果に表れています。

例えば仙台市での結果では

産科退院時：A 完母 43.6%、B 母乳>人工乳 24.9%、A + B = 78.5%

一 か 月 時：A 完母 42.4%、B 母乳>人工乳 30.0%、A + B = 72.4%

二 か 月 時：A 完母 46.0%、B 母乳>人工乳 27.8%、A + B = 68.8%

であり、母乳優位の育児は 70~80% となっています。

この数字は母乳率、特に完母率が産科退院時 78.7% と高かった 2014 年頃でも 75~80% であり、それ程大きな低下ではないことが分かります。

つまり、母乳優位の育児は減ってはいないが完母が減っているのが今回の調査で分かります。この原因は育休後職場復帰するという働く母親が増えており、それが大半になっていることにあると思います。

それは、そのほとんどの母親たちの気持ちは、職場復帰後「いずれ混合になる」、または「いずれ人工乳になる」というところにあるからと思われる。現在の保育園の状況からは、凍結母乳の管理や母親の来園による授乳などは全く望めない状態であり、職場復帰、保育園となれば必ず断乳、人工乳になるということが当たり前のこととなっているからです。

これらの傾向は現在のこの国の経済的な流れに起因しており、今後改善することはないと思われま。この流れの結果として最初から完母は望まずに、それが母乳育児は行おうが混合栄養が増えるという数字として表れていると解析出来ます。

それを如実に示していたのが小児科での 8 カ月健診での調査結果であり、母乳育児を続けて来た混合栄養の母親たちの多くがこの頃に人工乳に変更しています。この頃まで 60% 以上であった母乳優位の率が 47.6% まで低下し、20% 以下であった人工乳率が一気に 40.8% まで上昇していました。これはこの時期頃から保育園の確保のために人工乳に移行するためと思われます。

現在の育児の大変さ、それは経済的なことも含めて、殆どのお子さんの保育園通園の準備等々の理

由から、出産前の母親が職場復帰を見越した自分なりのバースプランを産科に示しています。その内容は母乳育児を志向しながらも完母ではなく、将来を見越した混合栄養であり、それを変える気は無いというものの様です。それは10月のフォーラムでの坂総合病院の若澤さんの報告からも何うことが出来ました。その結果として母乳育児を望みながらも数回の人工乳を追加するというパターンが増えているということになっています。

今回の調査で見ておくべきは、この状況でも2ヶ月までの完母率は40%を超えており、30%近くは母乳優位の混合であり、70%の母親は母乳優位の育児を続けていることです。しかもプラス10%は人工乳優位ではあるが母乳を続けており、トータルでは80%の母親が何らかの形で母乳を与えていることになります。

これは現在の様な状況下にあって母乳育児を支援するものとしては朗報と受け取っていいのではないかと考えています。

しかしながら、完母と混合についてはその差異については母親は恐らく何も考慮していないようです。これは仕方ないことと考えるべきかどうかは今後の議論になると思います。

では、その様な流れの中で支援者は母子に対してどのように接すればいいのでしょうか？まず母親たちが置かれている大きな流れ、少子化につながる流れを変えることは出来ず、8ヶ月時点での母親の職場復帰を控えた保育園育児への転換は変えられません。

ここではその支援の対策として3つの点を挙げてみます。

第1には、少なくとも6ヶ月までの母乳育児の継続です。それも可能な限り完母が望ましく、そのためには2ヶ月の時点までの完母の確立を考えたいと思います。

第2には、多くの母親たちは1年間の育休を取っており、出来る限り8ヶ月ではなく12か月の育休明け直前までの母乳育児の継続を勧めることです。

第3には、職場復帰後の母乳育児の継続の支援です。朝と夜、休日の母乳を勧めます。そのポイントとして母乳の長期的効果を母親に説明することは大切であるが、それだけで母親が納得するかどうかは難しいと思います。赤ちゃん目線からの母乳継続、「お母さんおっぱいやめないで」という様な心理的なことを話し合うのがもう一つのポイントかなと思います。

さて、これまでは母乳育児に対する支援は母乳率を上げる、完母を目指す、というような総論的なもので充分であったかもしれませんが、そのような総論的な説明のみでは母乳育児の継続には最早通じない時代になっています。

どのような支援が一人一人の母親に必要なのか、そのためにどのような内容が各母親にとって必要なのか、その各論的内容が支援者の一人一人に問われていることを痛感します。

これらの事実は、かつて医療の社会でEBM (evidence based medicine) が叫ばれた頃に、それが個人を統計数字の中に埋没させてしまう方法に対してNBM (narrative based medicine) による個人の生きざま、歴史、物語の大切さが提起されてきたことを思い出しています。

尚、今回は父親の育休については敢えて言及していません。問題外とは考えていませんのでご了解下さい。